4．3　生態系の人為的な攪乱状況（国外外来種の分布状況）

鳥類の場合は、渡り鳥のように自ら大移動を行う種も多くいますが、アヒルなどのように家禽として飼われていたものや、ガビチョウなどのようにペットとして飼われていたものが逃げ出し、野生化して自然界へ広がっている例がみられます。

このような国外外来種が生態的に優勢な場合、在来の生物種を圧迫したり、自然界では起こらない交雑によって、地域で保有されていた固有な遺伝子の喪失をもたらしたりすることで、生態系へ様々な影響を与えることが懸念されています。ここでは、人為的な生態系の攪乱を明らかにするために、国外外来種のうち外来生物法で特定外来生物に指定されているガビチョウ、ソウシチョウなどの確認状況について整理しました。

【特定外来生物の確認状況】　（鳥類調査）

- **国外外来種で特定外来生物に指定されているガビチョウ、カオジロガビチョウ、ソウシチョウを利根川水系の河川で確認**

国外外来種で特定外来生物に指定されているガビチョウ、カオジロガビチョウ、ソウシチョウについて確認状況を整理しました。

ガビチョウ、カオジロガビチョウ、ソウシチョウともに利根川水系の河川で確認されました。

（資料掲載：4-28、4-32～33 ページ）

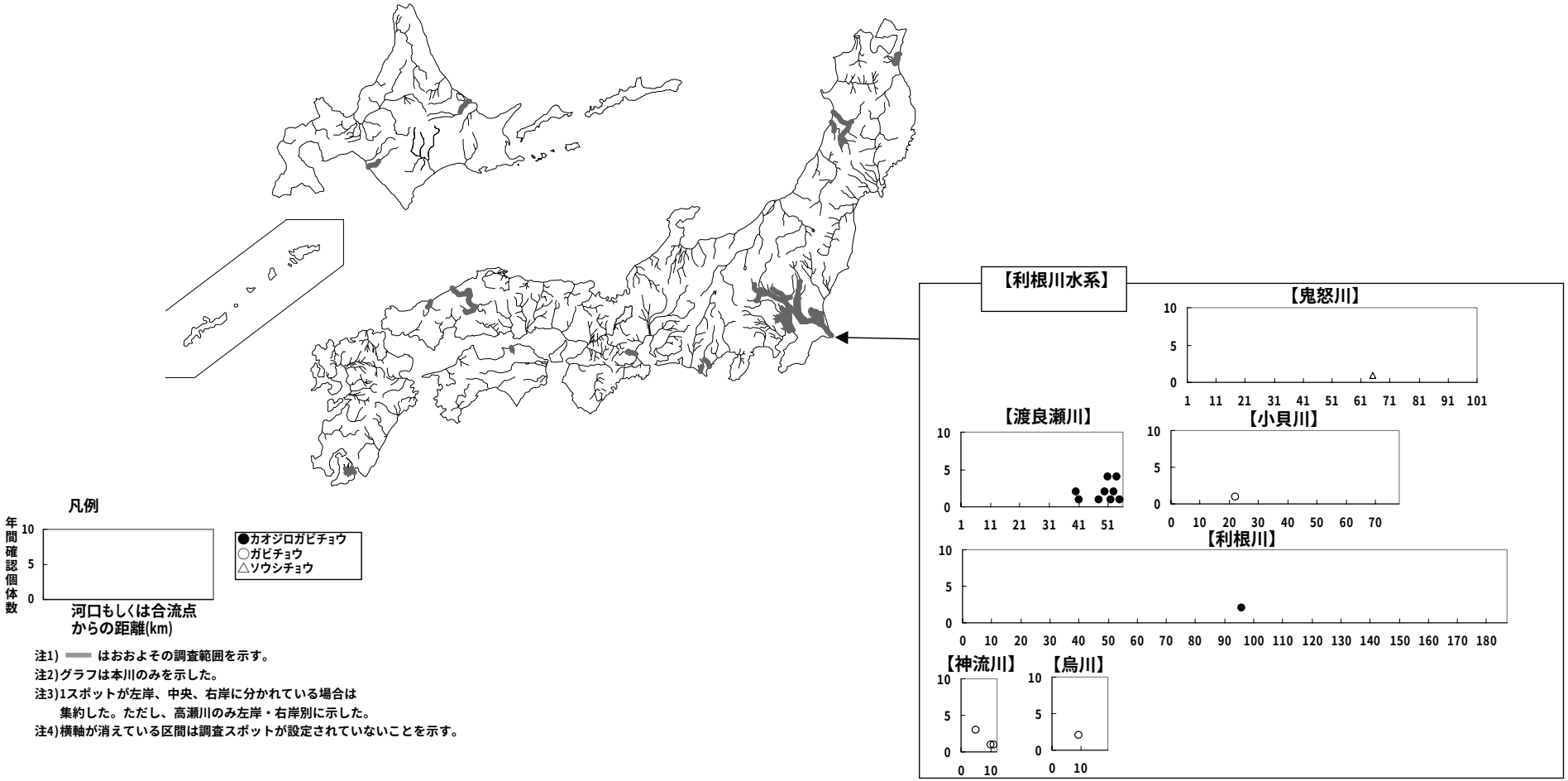
確認河川数の比較　（対象河川：19 河川）

種類	2 巡目 調査	3 巡目 調査	今回 調査
ガビチョウ	0 河川	0 河川	2 河川
カオジロガビチョウ	0 河川	0 河川	2 河川
ソウシチョウ	0 河川	2 河川	1 河川

注 1)集団分布地、移動時の確認を含む。
注 2)1 巡目は実施河川が少ないため対象から外した。
注 3)2 巡目、3 巡目も調査を行った河川で比較しているため、対象河川数は今回実施河川数よりも少ない。

特定外来生物に指定されているガビチョウ、カオジロガビチョウは、いずれも東アジア、東南アジアを原産とする種ですが、主に鳴き声を楽しむためのペットとして輸入されていました。ソウシチョウも、東アジア、東南アジアを原産とする種で、観賞用のほか、伝統的な化粧品であるウグイスの糞の代用品として飼育されていたこともあります。いずれも飼育個体の逃亡ないしは故意の放出が、野外への定着の主因であるとされています。主に低地林に定住し、これらの種が優占しているところもみられ、長期的には在来種への直接・間接の負の影響も懸念されています。今回の調査で、ガビチョウは利根川水系利根川、小貝川、烏川・神流川、カオジロガビチョウは利根川水系利根川、渡良瀬川、ソウシチョウは利根川水系鬼怒川、小貝川で確認されました。

2 巡目、3 巡目も調査を行った 19 河川での確認状況を比較すると、ガビチョウ、カオジロガビチョウは、これらの河川では河川水辺の国勢調査としては初めて確認されました。ソウシチョウは、前回確認された利根川、江戸川では今回は確認されませんでしたが、鬼怒川では河川水辺の国勢調査としては初めて確認されました。



注1) ━━ はおおよその調査範囲を示す。
注2)グラフは本川のみを示した。
注3)1スポットが左岸、中央、右岸に分かれている場合は
集約した。ただし、高瀬川のみ左岸・右岸別に示した。
注4)横軸が消えている区間は調査スポットが設定されていないことを示す。

ガビチョウ・カオジロガビチョウ・ソウシチョウの 1km ピッチの確認個体数（平成 19 年度調査結果　鳥類）